

報告事項ウ

平成24年度鳥取県教育研究大会の開催概要について

平成24年度鳥取県教育研究大会の開催概要について、別紙のとおり報告します。

平成25年2月12日

鳥取県教育委員会教育長 横 濱 純 一

平成24年度鳥取県教育研究大会の開催概要について

小中学校課・特別支援教育課・高等学校課

1 趣旨

県教育委員会では、全ての校種において、「学ぶ力」の育成を図るため、授業改革を進めるとともに、豊かな人間性と社会性を育成する学校づくりに取り組んでいるところである。

本研究大会では、こうした取組に関して、講演会や学校での研究内容とその成果の発表、意見交換等を行い、校種を超えて質の高い学びを追求し、その学びをつなげていくことの重要性を確認し、授業力の向上と、児童生徒の学びの質を高める取組の推進を図った。

2 概要

(1) 日時 平成25年2月7日(木) 午前10時から午後4時40分まで

(2) 会場 鳥取県立倉吉未来中心 小ホール

(3) 参加者数 292名(教育関係者・大学生等)

(4) 内容

①講演「これからの時代を生きる子どもたちに身につけさせたい学力」

講師 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部長 角屋重樹 氏

②パネルディスカッション「学びの質を高める授業改革」～子どもが主役の授業づくり～

コーディネーター 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部長 角屋重樹 氏

米子市立車尾小学校 「少人数学級を活かした授業改革～自ら学ぶ子どもを育てる授業づくり～」

鳥取市立北中学校 「中学校区で取り組む授業改革」

県立鳥取西高等学校 「生徒の主体的学びへの転換」

県立皆生養護学校 「子どもの発達と障がい特性に応じた学習の展開」

③実践発表「児童生徒の心に寄り添いながら進める、豊かな人間性と社会性の育成」

倉吉市立西中学校区 小鴨小学校、西中学校

「hyper-QUを活用した児童生徒理解と居場所づくり・仲間づくり」

県立智頭農林高等学校 「生徒の見取りを中心とした研修の推進」

3 成果

○参加者は、校種や職種を超えて互いに学びあうことの必要性を理解し、本県の目指す「学びの質の向上」が、いずれの校種においても追求していくべき本質的なテーマであることを再確認していた。

○学びの主役は子どもたちであるため、学ぶ「すべ」を身につける授業の重要性を再確認できた。

○各学校の学びの質の向上の取組を「とっとりの授業改革【10の視点】」に基づいて設計することにより、具体的な児童生徒の変容や教員の意識改革等の成果に繋がっていることを共通に認識できた。

※「すべ」 思考・判断・表現するための具体的なスキヤフォルディング(足場)

<参加者の感想(アンケートから)>

・校種の違う実践をうかがい、教育が(授業が)改善し、変わってきているのを実感した。また、形だけでなく「何のためにするのか」という目的意識の大切さを実感した。

・何かもやもやしていたことを、講演によってすっきりと整理していただいた。全てに「すべ(講演中のキーワード)」があったにもかかわらず、そのすべをきちんと子どもたちに届けていなかったことに気づき、工夫してしっかりと届けるようにしなくてはと感じた。

・研究大会の内容が、実践に即、結びつくことが多く大変参考になった。また、「言語活動の充実」という言葉に踊らされることなく、思考力・判断力・表現力を身につけさせていくことの大切さ、そしてその「すべ」を身につけさせることの大切さがわかりました。

・智頭農林高等学校の実践「見取り」は、高校の授業改革の根本を示す発表でした。大変貴重な取組であることを再確認しました。

(別紙資料)

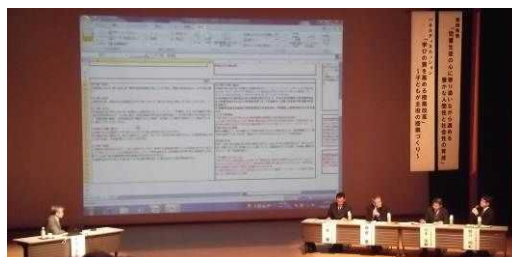
パネルディスカッションの概要

1 授業改革の取り組み実践報告 (各校 15分)

- (1) 米子市立車尾小学校 「問題解決的な学習過程、書く活動・ノート指導の取組 (理科)」
- (2) 鳥取市立北中学校 「魅力的な問題、思考・表現とわかる授業 (数学等)」
- (3) 県立鳥取西高等学校 「協同的な知識構成 (学び合い) による授業展開」
- (4) 県立皆生養護学校 「子どもたち個々の実態把握・評価と継続的支援」

2 授業づくりについて ～子どもが主役の授業とは～

- (1) 特色と工夫
 - ・車尾小学校 思考の見える化 (ノート作り)
 - ・北中学校 考えたくなる課題開発
 - ・鳥取西高校 教え込みから協同学習へ
 - ・皆生養護学校 子どもの実態把握と職員連携
- (2) 授業改革のポイント
 - ・授業法の改善
 - ・教材解釈の広がり
 - ・子どもの実態に応じた目標設定
 - ・生徒が主役となる授業になるような仕組み



3 組織づくりについて ～授業改革のための組織的な動きをどうつくるか～

- 車尾小 「教育研究団体の取組推進 (小学校間の連携)」
- 鳥取北中 「中学校区での取組推進 (小中連携)、中高連携 (鳥取西高との連携)」
- 鳥取西高 「中高連携 (鳥取北中との連携)」
- 皆生養護 「ビデオ等を活用した校内研究の工夫、幼稚部から高等部までの連携」

4 会場からの発言

- ・授業実践例 (鳥取西高校教諭)
- ・子どもの興味関心への対応方法について質問 (保育士)
- ・単元構成について質問 (伯耆町教委参事兼指導主事)

5 総括～学びの質を高める鳥取方式の授業改革に向けて～

コーディネーター 国立教育政策研究所 角屋重樹 氏

- (1) 子どもが主役となる授業を創造するには、教師が意図的に仕組んでいくことが重要

○指導法の工夫

「実態を的確に把握」「知的好奇心の喚起」「個と集団指導の関連付け」

○教材の解釈

- ・教え込み型でなく子どもの主体的な取組を支える教材
- ・「なぜ?」「分かった!」「できた!」「楽しい!」を実感できる授業を作る

○目標の解釈

- ・単なるスキルや操作の修得ではなく、意味や意義の実感を伴うより深い学びを目指す
- ・子どもの実態や状態に応じて柔軟に目標や手だてを修正することが重要となる

- (2) キーワードは「つながり」と「かかわり」

- 校種間連携により、教材解釈の視野が広がる (高校→中学校→小学校の一つのつながりが大切)
- 関わりにより、子どもの思考が多様になる。他者の存在や価値を認められるようになる

(別紙資料)

実践発表の概要

1 テーマ

「児童生徒の心に寄り添いながら進める、豊かな人間性と社会性の育成」

2 倉吉市立西中学校区 小鴨小学校、西中学校

「hyper-QU を活用した児童生徒理解と居場所づくり・仲間づくり」

- ・中学校区合同研修会（講師：教育センター梶川指導主事）を開催し、hyper-QU による見取りと支援・指導につなげていく小中が連携した取組を実践

hyper-QU を活用した児童生徒理解を中学校区で共通理解・共通実践

- ・西中学校：hyper-QU を活用したアセスメントの後、関係機関と連携をとり、不登校が改善
* 不登校生徒数（11月末現在）：昨年度22名→本年度12名
本年度不登校生徒数減少

3 智頭農林高等学校「生徒の見取りを中心とした研修の推進」

- ・hyper-QU の活用
- ・特別支援教育研究指定校として、生徒の見取りの技能を高める取組を進めている
- ・授業への意欲を喚起し、学力をつける取組を展開
こうした取組が、学校づくりの柱として進められている
→授業研究の中で生徒の見取りを中心とした研修を推進

4 総括

鳥取県教育センター 教育相談課 梶川 節美 指導主事

(1) 効果的なツールとしての hyper-QU の活用

- ・教師自身が作りたい学級の像を描き、子どもが素直な気持ちを回答すること、教師がそれを真摯に受け止めること、改善に生かすことが重要となる
- ・学級間、校種間の積極的な連携を図り、子どもの情報を共有し、改善に向けて知恵を出し合うことが、学級経営や児童生徒支援の改善に繋がる

(2) 特別支援教育の視点を取り入れた授業改善に向けての意識改革

- ・子どもの実態を的確に見取るには教員一人一人が多様な視点を持つことが重要。hyper-QU、引継、面談、聞き取り、授業研究、授業検討等の様々な方法を取り入れることで、見取りに「深み」が出る
- ・全教職員で共通認識されてきているからこそ、わかる授業実践が教師の専門性向上に大きく繋がっている実践である

